

富山県立富山中部高等学校 平成27年度学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

「学力の向上－アクションプラン1－」の②平日の平均家庭学習時間は3.6時間となり目標4時間以上に達しなかった。また「進路意識の高揚と進路希望の実現－アクションプラン2－」の②希望する進路の実現を果たした生徒の割合は目標50%以上に対して33%にとどまった。しかしながら「学力の向上－アクションプラン1－」の①互見授業・教科別授業研究会の実施回数、「進路意識の高揚と進路希望の実現－アクションプラン2－」の①大学探訪・進路講演会での満足度、「読書指導・体力の向上－アクションプラン3－」の①広報活動・読書指導、②持久走での自己記録更新、「学校行事・部活動の充実－アクションプラン4－」の①体育大会での充実感、②部活動での充実感、「探究力」「科学的思考力」「自己発信力」の育成－アクションプラン5－」の①野外実習・大学実習・課題研究の満足度、②海外研修での参加生徒の充実感・保護者の肯定感については数値目標を達成した。

学力向上の重点課題である家庭での学習時間の確保については、平日の家庭学習時間4時間以上の目標に対し、3年生は4月3.7時間、9月4.4時間、2年生は4月3.6時間、9月3.2時間、1年生は4月3.6時間、9月3.2時間であった。3年生は2学期になりようやく学習時間の増加が見られたが、1・2年生は減少した。昨年度から課題を精選し、個に応じた家庭学習を充実させる指導をすすめているが、今後は目標として単に時間を延ばすだけでなく、質・量ともに生徒一人一人が今以上に自主的・主体的に家庭学習に取り組めるよう工夫する必要がある。

一方、2年目に入ったスーパーサイエンスハイスクール事業では、課題研究を中心に大学実習・野外実習等を計画的に運営・実施するとともに、アメリカ研修やオーストラリア研修も計画通りに実施できた。大学実習・野外実習の満足度は平均95%、海外研修の充実感・肯定感も98%となり、本校のSSH事業は着実に前進し、成果を上げていると考えられる。

今後とも、生徒・保護者・地域・社会の期待に応え「日本を代表する優れた人材の輩出校であり続ける」ために、「計画・実行・検証」の学校評価システムを確立し、充実した教育活動を展開していきたい。

7 次年度に向けての課題と方策

スーパーサイエンスハイスクール事業が3年目を迎えるが、探究科学科を中心とした探究的な学習活動を一層充実させることに加え、卒業生の進路結果を踏まえて生徒の学習意欲を高める学習指導や高い意識を持たせる進路指導についてもさらに検討を加えていきたい。

生徒の学力向上を目ざすことはもちろん、学校行事や部活動の充実を継続して図り、健全な心身・優れた知性・豊かな情操を培い、民主的で自主性・創造性に満ちた人間の育成に努めていきたい。

8 学校アクションプラン

(様式5)

平成27年度 富山中部高等学校アクションプラン			- 1 -
重点項目	学力の向上		
重 点 課 題	①授業の水準を高める。 ②家庭での学習時間を確保させる。		
現 状	①授業力の向上を目指して互見授業等を行い、教科別授業研究会の充実に努めている。 ②生徒の学習意欲を高め、家庭学習時間を確保することが課題である。		
達 成 目 標	①互見授業を行い、授業力の向上を図るための教科別授業研究会の実施回数	②平日の平均家庭学習時間 ＊生活実態調査による一人あたりの平均学習時間とし、全学年を対象とする。	
方 策	各教科年間2回以上	4時間以上	
	○互見授業を全教員に対し公開する。 ○互見授業終了後、教科別授業研究会を開催し、3年間を見通した指導法を築き、指導目標を共有する。 ○定期的に生徒の学力や学習実態を分析し、授業方法の改善を図る。	○家庭学習時間の少ない生徒に対し、教科担当者や担任による個別指導を行う。 ○自学自習を促すプリントや、発展的課題を与えるなどし、主体的かつ意欲的に学習する習慣を身につけさせる。 ○新入生合宿で高校での学習法をしっかりと身につけさせる。 ○定期考査までの短期間の学習計画を示すなどして、「自学自習」の実践を指導する。 ○学習時間が足りている生徒に対しても、具体的な学習内容等について適宜アドバイスを行う。	
達成度	各教科年間2回以上を実施 (家庭科、情報科を除く)	3.6時間	
具体的な 取組状況	《互見授業》 ・1学期と2学期に各教科で互見授業を実施し、その後教科協議会を持ち、授業力向上に向けた指導法の研究を行った。また2学期の学校訪問時には、学習指導・学校課題部会において、各学年の補強すべき点や課題の与え方等について協議した。		
	《学習時間の確保》 3年 ・昨年度から引き続き、「国公立二次対策講座」や「難関大学講座」を開講し、生徒の進路志望に応じた指導を行った。 ・個別大学添削指導を全職員で分担して取り組んでいる。二学期から本格的に取り組んだ。 ・個人面接を定期的に行い、家庭学習時間の短い生徒に対しても、面接を通して学習法や時間の使い方等を指導した。 ・数学、英語で教科面接を実施し、学習法など個々の相談に対応した。 ・課題を減らすことで生徒が自由に学習できる時間を確保し、個々の生徒が持つ弱点克服を図った。 ・平日の学習時間は、4月 3.7時間、9月 4.4時間 ・平日の学習時間が4時間以上の生徒は、4月で40.0%、9月で70.1% ・平日の学習時間が2時間未満の生徒は、4月で 3.0%、9月で 1.8%		
	2年 ・主体的に自学自習する習慣を身につけさせる指導を行い、自ら課題を見つけて学習に取り組むようになった。具体的には長期休業中の学習については事前プリント等を配布し、計画表の作成と取り組み状況の記録、振り返っての評価と改善点を考えさせている。学期間におい		

		ては各教科から授業の進度表やテストの出題予定表を配付し計画的に学習に取り組ませた。難関大学対策講座による発展的課題への意識付けを実施した。 ・成績上位者に対しては、2学期より難関大学対策として国語・英語・数学の講座を定期的に開設した。また中～上位者向けの添削指導も実施している。成績不振者には、教科面接を実施し、また定期考査後や長期休業前に特別補講を実施するなど、生徒の多様化に対応したきめの細かい指導に努めた。 ・前年度に引き続き、始業5分前には着席を完了し、授業の準備を早めに取りくむよう指導し授業への集中力を高めることに努めた。 ・担任が、クラスの生徒を対象に年間6回以上の個人面接を実施し、個々の学力や生活実態に応じて学習の取り組み方を指導した。 ・発展探究や総合的な学習において、思考力・判断力・表現力の育成を行い、課題解決能力を伸ばすことに努めた。 ・英語・数学・国語について学期ごとに重点期間を設け、基礎学力の強化をはかっている。 ・平日の学習時間は、4月 3.6時間、9月 3.2時間 ・平日の学習時間が4時間以上の生徒は、4月 24.2% 9月 20.2% ・平日の学習時間が2時間未満の生徒は、4月 7.0% 9月 9.4%
		1年 ・新入生合宿で本校生にふさわしい生活習慣・学習習慣を身につけさせる指導を行った。 ・始業5分前には着席を完了し、落ち着いて学習することにより、授業への集中を高めることに努めた。 ・長期休業中の学習については、課題を精選した必修課題と自ら課題を設定し学問への自発的関与を促す目的の自主課題とに分けて課した。また、生徒には計画をたてさせ、学習時間の取り組み状況を記録させると共に、振り返りの評価を行い改善点を考えさせた。 ・生徒が計画的に学習に取り組むことができるよう、各教科から授業の進度表やテストの出題予定表などを早くから配付した。 ・成績不振者への特別指導に重点を置き教科面接・質問教室などきめの細かい指導に努めた。また上位者への添削などの個々の生徒の学力に応じて取り組み方を工夫した。 ・平日の学習時間は、4月 3.6時間、9月 3.2時間 ・平日の学習時間が4時間以上の生徒は、4月 38.9% 9月 21.7% ・平日の学習時間が2時間未満の生徒は、4月 7.6% 9月 7.6%
評価	A	《互見授業》 ・各教科において2回以上の互見授業と教科別協議会が実施され、その概要が報告されている。
	C	《学習時間の確保》 3年 ・2年次に比べ学習時間はかなり伸びた。また3年4月と9月を比べると、平日で約51分の学習時間の増加が見られた。教科の内訳を見ると1学期はまだ英・数・国中心の学習だったが、2学期になって理科、地歴・公民にかかる時間が増えてきた。 2年 ・学校行事や部活動に真剣に取り組む中で、頑張っている生徒が多い。課題の精選と共に自主的な学習を促した。長期休業中の学習の改善が課題である。 ・2学期以降、小テストを実施し、地歴、理科への意識が少しずつ高まってきている。 1年 ・平日の学習時間は例年と比較して差異は見当たらない。忙しい中頑張っている生徒が多い。 ・長期休業中の学習量が少ないことが気かりである。 夏季3.8時間 冬季4.2時間 2時間未満 夏季13.8% 冬季7.7%

学校評議員の意見	《互見授業》
	・授業力向上にとって適切な目標設定である。 ・教科別授業研究会では積極的な意見交換を望みたい。 ・教員の個性は大切だが、進度や内容にばらつきがないようにする。 ・必修の課題を減らしたこと、アクティブラーニングへの取り組みが評価できる。 ・土曜特別授業への取り組みも評価できる。
次年度へ向けての課題	《学習時間の確保》
	・適切な目標設定である。 ・学習時間の中味や充実度について生徒自身に振り返らせたい。 ・土曜特別授業で実施される小テストが効果的である。
	《互見授業》
	・学習効果を高めるための授業法など、明確な目的意識やテーマを持って実施できるような体制を考えていきたい。
	《学習時間の確保》
	・生徒が課題達成の成就感が味わえるよう、課題の質・量についてさらに検討する必要がある。 ・生活実態調査結果を分析し、自主的・主体的に学習に取り組む姿勢を育てる方策を図る。
	3年
	・与えられた課題を仕上げるだけでなく、自分で教材を選び、理解を深めていく姿勢や苦手教科を作らないようバランスの取れた学習を促す必要がある。そのためには早い学年からの具体的な指導が必要である。
	2年
	・自主学習の充実、不得意教科の克服、長期休業中の学習の充実について引き続き検討していく。上位者への集団としての啓発、下位者へのきめ細かな指導についても継続していく必要がある。 ・SSHや探究活動の成果を生徒の学力の向上に活かす工夫をする必要がある。
	1年
	・長期休業中の学習について、学年会、教科会等において、家庭学習時間確保のための対応策の検討を行っていく必要がある。 ・自主的に発展学習および苦手克服に取り組む姿勢を育てることが大切である。下位層への指導はさらなる工夫が必要である。

(様式 5)

	対し、事前アンケートを取って要望の多い分野から講師を招き10分野以上の分科会を設置する。なお講師は生徒が具体的に進路を考えられるよう、身近な存在として本校卒業生を主に依頼する。 ○1年次にも進路や生き方を考える講演会を行い大学や学問について知る機会を増やす。	持たせるよう指導する。また、3年次では個別指導を特に強化し、生徒一人一人が志望大学の要求する学力に到達するように努める。 ○探究的活動や体験学習の機会を増やし、大学で何をするかについて具体的なイメージを抱かせる。
達成度	・大学探訪（2年） 97% ・進路講演会（2年） 91%	第1志望校の合格率 33%
具体的な取組状況	1年 ・OB・OGの大学生を招いて「進路を考える懇談会」を実施し、大学・学部の特徴や高校時代の学習法、進路決定の経験などを話してもらうことで、文理選択の一助とした。事後アンケートでは「大変参考になった」と「参考になった」が合わせて90%であった。 ・1学年講演会は、富山県民会館で開催された富山県建築設計整理協同組合設立50周年記念講演会に参加した。（講師はゼネラルモーターズ社チーフデザイナー 奥山清行氏） ・探究科学科では、立山野外実習、能登臨海実習、歴史施設見学および基幹探究報告会を実施することによって、探究心を養うとともに進路意識を高めることができた。 ・国際人育成と科学力養成を目的に、3月にはオーストラリア研修およびイングリッシュ・サイエンスキャンプを予定している。 2年 ・東京方面と金沢大学への大学探訪を実施した。東京方面は7月21日～22日の1泊2日で211名が参加した。東京大学（駒場・本郷）・お茶の水女子大学・東京工業大学にて模擬授業、施設見学、大学の概況説明などを受けたほか、宿泊先ではOB・OGによる懇談会、国会議事堂の見学を実施した。また、金沢大学は8月11日に92名が借り上げバス利用でオープンキャンパスに参加した。 ・社会の様々な分野で活躍されている卒業生を招き、進路講演会を11月14日に実施した。事前アンケートを参考に法律、行政、経済、貿易、教育、理工、薬学、医学、農学等の分野から16分科会を設定し、生徒は希望する2分野の講演を聴いた。司会進行、記録、誘導を生徒に務めさせ、質問を積極的にさせるなど、参加意識を高める工夫をした。 ・夏期休業期間を利用して、東京大学・富山大学・富山県立大学で実験実習を行ったり、米国研修を実施するなど、進路意識高揚につなげた。 3年 ・こまめな面接指導、個別指導を通じて、各生徒の進路指導に努めた。 ・成績上位者を対象に難関大学講座や説明会を開講し、より高い進路志望を持ち続けさせ、発展的な学習に取り組ませた。同時に「国公立二次対策講座」や「基礎講座」を開設し、様々な学力層に対応する指導を心がけた。 ・全教科において教員全員で分担し個別大学添削指導を行ったり、読書の時間を利用した小論文対策演習を実施するなど、生徒一人一人の進路実現を図った。	
評価	《大学探訪》 ・東京方面の大学探訪は、実施後明らかに進路意識が高まり、非常に有意義な訪問であった。特に東大では駒場・本郷両キャンパスを訪問し模擬授業を受けることで学問に対する刺激を受け、また宿舍でのOB・OGとの懇談会は大学生活や学習方法を学ぶ絶好の機会となった。さらに研究室の見学も実施することで大学での研究の一端を垣間見るができた。OB・OGの協力は生徒の意欲を高めるために欠かせない。 ・金沢大学は学校で一括申込みをし実施した。東北大学や富山大学等もオープンキャンパスの自主的参加を促したこともあり、多くの生徒が参加し、貴重な体験をした。 A 《進路講演会》	

	・生徒の進路希望を参考に文系・理系にわたる幅広い分野の16分科会（講師17名）を招き、実施した。講演では進学した学部からどのような職業選択が可能であるかも示して頂いた。生徒の職業に対する視野を広めるとともに進路意識を高めることができた。また、高校時代に何をすべきかを真剣に考えるきっかけとなった。 ・司会進行・記録を生徒が行ったり質問を積極的に行うことで、参加意識が高まった。記録及びアンケートによれば、深く感銘を受けて、自分の進路を考える契機になった生徒が多く、目標が達成された。
	《進路の実現》 ・国公立大学合格者数(現役)は、東京大学10名をはじめ計156名であったが、センターテスト前に調査した第1志望校に合格した生徒の割合は目標の50%に届かなかった。今年度の生徒は「第1志望をあきらめない」精神のもと、志望が非常に高く、全体の52%（昨年は40%）が難関大学または医学部に出願しており、来年再挑戦する生徒も多い。
学校評議員の意見	《大学探訪・進路講演会》 ・満足度が高く取り組みが効を奏していると思われる。 ・東京方面以外の大学見学も企画してほしい。 ・大学の情報を2年生の内から保護者にも広く伝えてほしい。 ・技術立国であることを考え、理系のレベルの高い大学への進学をもっと勧めてほしい。 ・進路講演会は1年生で文理選択の前に実施するとよい。 《進路の実現》 ・H27年度の進学実績はめざましい。 ・高い志望を持たせると同時に生徒を息切れにさせないようにしてほしい。 ・多岐にわたる生徒の希望について個々に十分指導してほしい。 ・志望大学という指標に加えて志望学科という指標も設けてみてはどうか。
次年度へ向けての課題	《大学探訪》 ・東京方面の大学探訪について 大学の期末試験と日程が重なり、駒場キャンパスや一橋大学では特別の許可を得ての見学となった。この時期の訪問は大学側・卒業生にとっても無理をお願いをしている状況であり8月上旬への変更が望ましい。なお東京大学訪問では本校OBである工学部の長棟輝行教授のご尽力により、施設見学や講義室確保が可能になっている。ただし以前より実施していた安田講堂内部の見学は、施設利用費用が必要となり実現していない。 ・金沢大学のオープンキャンパス参加は当初8月10日実施の予定であったが、大学側からの要請により日程を変更した。各学域等に人数制限を設けているため、早めの申し込みと担当者との密な連絡が必要と思われる。 《進路講演会》 ・講師の選定についてPTA役員との打ち合せを8月下旬に行い適切な選考となった。 ・講演後の記録内容のチェックを講師にお願いすることは必要である。 ・職業に対する視野を広めるため分科会数を16と増やした。現在は2学年単独だが、進路選択を考えると早期実施が有効であり1学年との合同実施が望ましい。 《進路の実現》 ・授業内容や方法、課題の精選、自学用教材の工夫、校内模試のあり方を再検討するなど、大学受験に対応できる学力を段階的に身につけていく指導をさらに研究する必要がある。 ・個々の生徒とのコミュニケーションを大切にし、添削指導や面談のスキルを上げるなど、個別指導の充実をより一層図る必要がある。 ・近年、志望の高さと大学受験時の学力が比例する傾向がますます強くなっている。1年の早い段階から、高い志を持って努力する姿勢を養う必要がある。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

(様式5)

平成27年度 富山中部高等学校アクションプラン			- 3 -
重点項目	読書指導・体力の向上		
重点課題	①読書指導を充実し、図書館利用の広報周知を行う。 ②体力の向上に努めさせる。		
現状	①生徒には、読書を通じて自らの生き方や社会のあり方などを思索する時間が必要であるが、学校生活が多忙化し、なかなか読書の時間が取れていない状態である。 ①行事が多く、特別授業期間に十分に読書の時間を設定することが困難になってきている。 ②体力の低下が危惧される生徒が増えてきている。		
達成目標	①生徒への読書、図書館利用を促す広報刊行物の年間配布回数及び読書の時間（D）の数	②2年次において、持久走の自己最高記録を更新した生徒の割合	
	広報活動10回以上 読書の時間（D）年間15時間以上（1・2年）	70%以上	
方策	○図書の広報刊行物を月一回以上発行する。 ○読書の時間を計画的に確保する。また、年2回読書会等を行う。 ○読書教養講座の実施や「本の虫」などの発行をとおして図書委員による主体的な活動を行い、図書館への理解を深める。	○全学年、体育の授業時に毎時10分間程度のサーキットトレーニングを実施する。 ○前年度の自己記録を参考に今年度の自己目標を明確にし、体育の授業や部活動等で意欲的なトレーニングに結びつける。	
達成度	・広報活動20回以上 ・読書の時間（D）15時間	75.4%	
具体的な取組状況	《広報活動》 ・図書委員会の活動と書籍を紹介する特集冊子「本の虫」を9月に全生徒に配付した。また、本の感想や図書館の新书推荐する「図書館だより」を10回教室掲示した。職員室前と図書館前に「新书推荐案内」を月に2～3回掲示した。 ・1学期に読書教養講座、2学期の文化祭に企画展（「図書委員が選ぶ『あなたに薦めるこの一冊』」）を行い、3学期には図書館誌「富山中部図書館」を発行し、全生徒に配付した。 ・新入生に対して、入学直後のLHの時間を利用して図書館オリエンテーションを行った。 《読書運動》 ・LHの中に年15時間読書の時間を設定している。 ・8月と12月に読書会を行い、その成果を「ひとりで読むよりも」としてまとめ、2月に各教室に配付した。 ・3年生に対して「小論文対策参考図書案内」を作成し、小論文指導の一助としている。 《体力の向上》 ・サーキットトレーニングの意義について理解させトレーニング効果が上がるよう実施した。		
評価	B	《読書指導》 ・全教職員の共通理解のもと、読書指導の充実がなされている。 ・読書の時間の本の選定や、読書会の運営などにまだ改善の余地があると思われる。	
	A	《体力の向上》 ・継続して行ってきたことで、トレーニング効果が上がっていることを自覚することができ、意欲的に取り組むことができた。	
学校評議員の意見	《読書指導》 ・自分で本を選ぶ時間もないのでよい取り組みだと思う。 ・図書の貸出冊数が減っているのが気がかりだ。 ・読書の時間をはじめとして読書指導は充実していると感じる。 《体力の向上》		

	・健全な肉体には健全な精神が宿ると言われる。ハードなトレーニングもよいと思う。 ・サーキットトレーニングはよい取り組みである。 ・達成度が素晴らしいと思う。
次年度へ向けての課題	《読書指導》 ・読書離れ・活字離れが大きな問題となっている今、生徒が手軽に本を手にとってくれるような工夫が必要である。 ・読書の時間の本の選定が生徒の実態と乖離し、読書の時間が実効あるものになっていない。知識・教養を高めることはもちろんだが、「読み切った」という達成感も味わわせたい ・読書会も形骸化しつつあるので、ビブリオバトルなど新しい試みも取り入れる必要がある。 《体力の向上》 ・自己の記録、課題を把握し、積極的に取り組む姿勢の育成をはかる。 ・各自の体力に応じて、運動負荷の強度を設定する。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

(様式5)

平成27年度 富山中部高等学校アクションプラン			－ 4 －
重点項目	学校行事・部活動の充実		
重 点 課 題	①体育大会をより充実させる。 ②部活動を充実させる。		
現 状	①体育大会へのあこがれが、本校への志望理由の一つになるなど、体育大会は、本校最大の行事として知られている。また、体育大会を通じて生徒たちは人間的に大きく成長している。 ②全校生徒に対し、いずれかの部に所属するよう勧めている。生徒は、学習と部活動を両立させるために懸命に取り組んでいる。		
達 成 目 標	①体育大会に充実感を持つ生徒の割合 ＊大会終了後に実施する、生徒会によるアンケート	②部活動に充実感を得た生徒の割合 ＊3年生全員を対象にした、8月下旬のアンケート	
	80%以上	70%以上	
方 策	○体育大会の競技種目や応援の仕方について、生徒会を中心に改善を常にはかる。 ○競技種目の練習や準備活動が行き過ぎないように、適切な指導を行う。	○部活動への参加を積極的に促す。 ○限られた時間の中での、効率的な練習や活動を普段から考えさせる。 ○個々の生徒が、学習と部活動のバランスが取れるよう、ホーム担任と部顧問が連携を取って指導する。	
達成度	95.9%	98.0%	
具体的な 取組状況	《体育大会》 ・全体練習は10日間、リーダー活動は19日間を設定した。 ・新グラウンドを使っの初めての大会のため、旧校舎におけるグラウンドと河川敷グラウンド両方の大会運営を参考に、関係各部と連携しながら会場整備や備品準備を入念に行った。 ・河川敷グラウンと第一・第二体育館を使用し、各団リーダーが調整しローテーションを組んで練習場所を確保した。 ・これまでの伝統を受け継ぎながらも、1年生の団分けや名簿登録の仕方など、基準を明確にし、不公平感のないルール作りをした。 ・大会当日や練習時に怪我や事故がないように細心の注意を払い、また緊急の場合に備えての体制を整えた。 ・保護者の車で来校や入校時刻の制限を行い、大会の円滑な運営を目指した。 《部活動》		

	・全生徒が何らかの部に所属するよう指導した。 ・学習と部活動の両立のため、活動後の下校時刻を遵守するよう指導した。 ・スポーツエキスパート（7人）を招き、部活動の充実を図った。 ・今年度も、週2回担当部活動の生徒が清掃を行うよう指導した。				
評価	<table> <tr> <td>A</td><td> 《体育大会》 ・95.9%の生徒が満足しており、ほぼ全員の生徒が何らかの活動に関わり、充実した時間を過ごしたことが考えられる。 ・不満足の原因として、部活動の練習時間の不足や学習との両立の困難さをあげる者が多い。 ・初めての新グラウンドでの大会で、試行錯誤の計画ではあったが、運営を効率的に行うことができた。 </td></tr> <tr> <td>A</td><td> 《部活動》 ・9月上旬に行ったアンケート結果によれば、98.0%の生徒が本校の部活動に満足しており、目標は十分に達成している。 ・不満足の原因としては、学習との両立が困難なこと等があった。 ・7限授業週2日制であることに加え、多くの行事や活動が放課後の時間帯にわたるため、部活動の時間が不足している。 ・SS部を中心に多くの発表会に参加する機会が増えた。 ・運動部、学芸部とも活発に活動を行い、多くの部が北信越大会や全国大会に出場するなど、成果を上げた。 </td></tr> </table>	A	《体育大会》 ・95.9%の生徒が満足しており、ほぼ全員の生徒が何らかの活動に関わり、充実した時間を過ごしたことが考えられる。 ・不満足の原因として、部活動の練習時間の不足や学習との両立の困難さをあげる者が多い。 ・初めての新グラウンドでの大会で、試行錯誤の計画ではあったが、運営を効率的に行うことができた。	A	《部活動》 ・9月上旬に行ったアンケート結果によれば、98.0%の生徒が本校の部活動に満足しており、目標は十分に達成している。 ・不満足の原因としては、学習との両立が困難なこと等があった。 ・7限授業週2日制であることに加え、多くの行事や活動が放課後の時間帯にわたるため、部活動の時間が不足している。 ・SS部を中心に多くの発表会に参加する機会が増えた。 ・運動部、学芸部とも活発に活動を行い、多くの部が北信越大会や全国大会に出場するなど、成果を上げた。
A	《体育大会》 ・95.9%の生徒が満足しており、ほぼ全員の生徒が何らかの活動に関わり、充実した時間を過ごしたことが考えられる。 ・不満足の原因として、部活動の練習時間の不足や学習との両立の困難さをあげる者が多い。 ・初めての新グラウンドでの大会で、試行錯誤の計画ではあったが、運営を効率的に行うことができた。				
A	《部活動》 ・9月上旬に行ったアンケート結果によれば、98.0%の生徒が本校の部活動に満足しており、目標は十分に達成している。 ・不満足の原因としては、学習との両立が困難なこと等があった。 ・7限授業週2日制であることに加え、多くの行事や活動が放課後の時間帯にわたるため、部活動の時間が不足している。 ・SS部を中心に多くの発表会に参加する機会が増えた。 ・運動部、学芸部とも活発に活動を行い、多くの部が北信越大会や全国大会に出場するなど、成果を上げた。				
学校評議員の意見	<table> <tr> <td>《体育大会》</td><td> ・素晴らしい体育大会です。行きすぎた練習や怪我のないよう見守ってほしい。 ・本校最大の行事だが、先生方の配慮、指導も十分行き届いている。 ・人間成長に大きく寄与している行事なので、維持発展を望む。 </td></tr> <tr> <td>《部活動》</td><td> ・達成度が素晴らしい。生徒の時間の使い方、切り替えが見事である。 ・活動時間を遵守して成果をあげるよう指導してほしい。 </td></tr> </table>	《体育大会》	・素晴らしい体育大会です。行きすぎた練習や怪我のないよう見守ってほしい。 ・本校最大の行事だが、先生方の配慮、指導も十分行き届いている。 ・人間成長に大きく寄与している行事なので、維持発展を望む。	《部活動》	・達成度が素晴らしい。生徒の時間の使い方、切り替えが見事である。 ・活動時間を遵守して成果をあげるよう指導してほしい。
《体育大会》	・素晴らしい体育大会です。行きすぎた練習や怪我のないよう見守ってほしい。 ・本校最大の行事だが、先生方の配慮、指導も十分行き届いている。 ・人間成長に大きく寄与している行事なので、維持発展を望む。				
《部活動》	・達成度が素晴らしい。生徒の時間の使い方、切り替えが見事である。 ・活動時間を遵守して成果をあげるよう指導してほしい。				
次年度へ向けての課題	<table> <tr> <td>《体育大会》</td><td> ・練習中の怪我を防止する方策を引き続きすすめていく必要がある。 ・9月当初に各部の大会が多く、部活動時間の確保の観点からも、運営についてさらに検討を進める必要がある。 ・今年は天気に恵まれたが、雨天時の練習場所や方法を検討する必要がある。 </td></tr> <tr> <td>《部活動》</td><td> ・学習と部活動の両立に悩む生徒が多いため、学年と各部活動顧問が一層の連携を図ることが必要である。 ・日々の活動における怪我の予防に対し、生徒へのしっかりとした指導が必要である。 </td></tr> </table>	《体育大会》	・練習中の怪我を防止する方策を引き続きすすめていく必要がある。 ・9月当初に各部の大会が多く、部活動時間の確保の観点からも、運営についてさらに検討を進める必要がある。 ・今年は天気に恵まれたが、雨天時の練習場所や方法を検討する必要がある。	《部活動》	・学習と部活動の両立に悩む生徒が多いため、学年と各部活動顧問が一層の連携を図ることが必要である。 ・日々の活動における怪我の予防に対し、生徒へのしっかりとした指導が必要である。
《体育大会》	・練習中の怪我を防止する方策を引き続きすすめていく必要がある。 ・9月当初に各部の大会が多く、部活動時間の確保の観点からも、運営についてさらに検討を進める必要がある。 ・今年は天気に恵まれたが、雨天時の練習場所や方法を検討する必要がある。				
《部活動》	・学習と部活動の両立に悩む生徒が多いため、学年と各部活動顧問が一層の連携を図ることが必要である。 ・日々の活動における怪我の予防に対し、生徒へのしっかりとした指導が必要である。				

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった

(様式5)

平成27年度 富山中部高等学校アクションプラン		— 5 —
重点項目	「探究力」・「科学的思考力」の育成、「自己発信力」の育成	
重点課題	①SS事業を計画的に運営・実施する。 ②海外研修により国際交流、学術交流を深める。	
現状	①これまで旧理数科や探究科学科では野外実習や課題研究等のさまざまな探究活動を通して、生徒の学問的な探究心の向上をはかってきた。本校がスーパーサイエンスハイスクールに指定されたことによって、探究活動を継続・発展させるとともに、理数科学科に一層の重点を置いた計画を立てて「探究力」・「科学的思考力」の育成に効果的な指導法、評価法を	

	開発する。 ②平成11年度より継続してきた中国遼寧省との交流に加えて、7月に第2回米国研修、3月にはオーストラリア研修を実施する。これらの研修を通して、グローバル社会で将来活躍できる「自己発信力」を身につけた人材の育成を目指す。	
達成目標	①野外実習、大学実習、課題研究に対するそれぞれの満足度 *各実習ならびに発展探究発表会（SSH成果発表会）後に実施するアンケート	②第2回米国研修に参加した、生徒の充実感および保護者の肯定感の割合 *帰国後の事後調査によるアンケート
	各90%以上	参加生徒の充実感 80%以上 保護者の肯定感 70%以上
方策	○野外実習や大学実習については実習の内容や方法等について十分に打合せを行い、生徒が興味関心を抱き、積極的に実習に参加できるよう工夫する。 ○発展探究発表会（SSH成果発表会）、三校合同課題研究発表会、基幹探究報告会の発表内容を充実させる。 ○SSH事業および各行事でループリックによる評価を行う。	○事前研修を効果的に組み立て、研修の目的研修内容を明確にし、参加者が各自の研修課題を持つように促す。 ○事後研修を行い、研修後の英語力の伸びをはかる。また、今後の自分の生き方あり方を各自が考え、それを実行に移そうとする姿勢を育てる。
達成度	・野外実習の満足度 100% ・大学実習の満足度 97% ・課題研究の満足度 93%	・参加生徒の充実感 100% ・保護者の肯定感 98%
具体的な取組状況	《SSH事業》 ・野外実習は1年生探究科学科生徒が立山自然観察実習と能登臨海実習のいずれかに参加した。実習中はノートPCを使用してデータ等の入力・処理を行って、立山実習では実施当日、能登では実施の翌日にスライドを用いてグループ発表を行った。 ・大学実習では、2年生理数科学科全員および普通科理系の希望者に対し、実習内容で選択して参加できるようにした。各講座は、実習内容によって1日～3日間で実施した。 ・2年生探究科学科の課題研究では、富山大学の教官（12名）から6月と11月の2回、各ゼミごとに指導を受けた。また、大学院生らがTAとして指導に加わった。 ・探究活動の評価にあたっては、生徒によるセルフアセスメント、教員によるループリックを用いた評価、さらに生徒との面接を実施することで、適正かつ客観性を高めた。 ・「探究ノート」を導入して、生徒に探究活動の記録を記させることで、個人の活動を評価できるようにした。	
	《海外研修》 ・米国研修は事前研修を10回行った。訪問大学・研究施設についてのリサーチ、英会話演習、現地で滞在する際に必要とされる一般的知識の確認、地理の教員による講義、自己研修課題の設定や前年度参加者との懇談など10回の研修中で自分が何をどんな方法で学ぶのかということを明確にした。 また、研修中各自がグループの中でどのような役割を果たして自主性を育てるのかを考えた。事後研修は2回行った。CASEC TESTにより研修後の英語力を測ったり、今後自分はどんなことに取り組んで自分の目標を達成していくのかという方向性を、ふり返りシートで確認した。 自己研修課題についての成果をまとめ、第2回米国研修報告書を作成した。	
評価	《SSH事業》 ・探究力の養成を問うアンケートでは1年生の85%が野外実習、2年生の85%が大学実習、さらに93%が発展探究α（課題研究）で効果があったと回答している。	

	A	また科学的思考力についても2年生の87%が効果があったと回答している。 ・2年生は、文化祭に大学実習の発表、三校合同課題研究発表会、発展探究課題研究発表会と3回発表の機会があり、発表能力が高まったとする回答は81%（課題研究発表会前の時点）であった。
	A	《海外研修》 ・米国研修は語学力や自己発信力をつけるのみならず、将来の夢や進路について強く考えるきっかけになっている。国際的視野を身につけることにも有効であり、今後も継続するとともに、研修を通してさらなる学びの充実を期待する。
学校評議員の意見		《SSH事業》 ・各種の取り組みの満足度が高くすばらしい。 ・探究科学科として理数、人文両分野ともにますます力を注いでいただきたい。 ・さまざまな仕掛けで知的好奇心や探究心の涵養に努めていることがわかり敬服する。
		《海外研修》 ・事前事後の指導が念入りに行われていることが生徒の自信につながる充実した研修になっているのだと感じる。 ・次年度は中国東北育才学校との交流やオーストラリア研修も加わり、国際経験を積む機会も一層充実することと感じている。
次年度へ向けての課題		《SSH事業》 ・SSH指定3年目となり、「SS 基幹探究」から「発展探究β」まで、3年間を通して探究力の養成に系統的に取り組むため、「SS 基幹探究」を課題研究の基礎力を培う科目となるよう内容を見直す。 ・ルーブリックによる評価の研究をさらに進める。また、現在は理数科学科と人文社会科学科のみのルーブリックとなっているが、数学系や実験系ではない理科の課題研究ルーブリック、協働のルーブリックなどを作成し、探究活動を多面的に評価していく。
		《海外研修》 ・米国研修の日程について午後の研修の見直しがあげられる。ボストンでの大学訪問の精選と充実（研究施設訪問や大学教授によるレクチャー）と共に、タフツ大学での滞在の充実（留学生との交流）を考える必要がある。また事前研修・事後研修についても日程を考慮し、研修が有意義なものになるような検討を継続していく必要がある。

評価基準 A達成した Bほぼ達成した C現状維持 D現状より悪くなった